

別添1 (様式1)

令和元年度 岡山県立津山高等学校 学校評価書

校長 菱川 靖人 印

A 自己評価

I 評価結果(別紙)

II 分析・改善方策

今年度は、具体的な目標として次の4つをあげ、実践的に教育活動に取り組んできた。それぞれの目標ごとに次にまとめる。

- 1 「確かな学力」と「ゆるぎない人間力の形成」について、項目ごとにまとめた。
- (1) 「授業や行事をとおしてのVGRの育成」では、SSHの開発目標として掲げている「Vision(先を見通す力・V)、Grit(やり抜く力・G)、Research Mind(探究心・R)の育成」を授業や行事をとおして育成することに努めた。各年次ともに普段の授業や担任面談、進路十六夜等での指導を通じて学習時間や学習の質に向上が見られた。1、2年次ともに70人程度が難関大を志望しており、3年次は難関大(医学科を含む)に15人が合格した。また、2、3年次は十六夜祭、部活動等を通じてリーダーシップやコミュニケーション能力の高まりが見られた。サイエンス探究Ⅱや十六夜プロジェクトⅡを通じたVGRの伸長では、理数科は顕著であったが、普通科ではやや低くなっており、十六夜プロジェクトⅡの一層の充実を図りたい。
- (2) 「大学入試への組織的対応」では、生徒のVGRの伸張が大学入試に対応できる力につながると考え授業改善を進めた。例年の研究授業週間に加えて、VGR研修会、「津高型学習指導のスタンダード」の作成と普及、代表的な授業取組を紹介した「企画通信」の発行、VGRの視点を取り入れた授業アンケートの改善等によって、教員の共通理解と授業改善に努めた。また、大学入学共通テストにおける英語民間試験の成績提供システムへの準備も進めてきた。
- (3) 「あいさつ励行を含めた基本的な生活習慣の確立」では、あいさつや集会での集合に向上が見られた。ただしあいさつ指導では、教員が率先垂範する指導が中心であったため、生徒におけるあいさつ指導の実感は高くない。3年次では、センター試験後も清掃を下級生任せにせず自主的に取り組む姿も見られた。
- 2 「魅力ある学校づくり」について、項目ごとにまとめた。
- (1) 「広報の見直し」では、見やすくメッセージ性の高いHPへの刷新やスマートフォンへの対応、学校案内の刷新を行った。例年実施しているオープンスクールや学校説明会、広報誌「十六夜」についても、時期や内容等の見直しを図った。今年度、一般入学者選抜の欠席者が多かったこともあり、理数科だけでなく普通科の魅力発信が次年度の課題である。
- (2) 「地域連携のあり方の研究及び生徒と地域を結びつける教育の実践」では、2年次の四校連携講座「地域創生学」に今年度も9名が参加し、その後の地域での意見交換会等にも積極的に参加した。また、その学習成果を「高校の魅力化フォーラム」でも発表した。その他、近隣2中学校への学習支援ボランティアにも33名が参加した。十六夜プロジェクトⅡでもいくつかのグループが地域を研究フィールドとしてフィールドワークを行うことで、地域への理解と関心を高めた。
- 3 「中高連携のさらなる推進」について、項目ごとにまとめた。
- (1) 『切磋琢磨』の実践及び取組二年目の成果と課題の検証』では、「切磋琢磨」をテーマとする中高連携研修会、中高融合紙上準備会を実施した。成績推移では、1年次7月進研模試(Sゾーン49人)上位30人に津山中25人(83%)が、1月進研模試(Sゾーン47人)では津山中23人(77%)と、今年度も入学生が上位に入ってくる傾向が見られた。一方、2年次では、7月進研模試(Sゾーン22人)上位30人に津山中20人(67%)が、1月進研模試(国数英Sゾーン27人)では津山中25人(83%)と進学生が盛り返しており、各年次ともに「切磋琢磨」の様子が覗えた。なお、成績推移以外は教員の観察に負うところが大きく、「切磋琢磨」をはかる指標づくりが今後の課題である。
- (2) 「中高のインタラクティブな関係の推進」では、中高連携係が主管する中高連携会議を毎週開催し、中高連携事業の円滑な実施や情報共有化を図った。中学3年生の早期入部や中学3年生が高校1年生から話を聴く会、中学2年生の高校授業見学など昨年度の反省を生かしながら実施できた。また中学校課題研究が十六夜プロジェクトⅡにおける意識向上につながったり、教育系志望者が中学校教員に質問に行くなど新たな展開も見られるようになった。

- 4 「働き方改革の推進」について、項目ごとにまとめた。
- (1) 「業務内容の見直し検討」としては、休日夜間の留守番電話対応の導入、ブログの更新方法の改善などが実現したが、在校時間の大幅な改善までは至っていない。職場の環境改善では、100周年記念館及び各教室のスクリーンの更新を進め、授業や行事での準備時間の短縮を図った。今後も継続的に検討を行っていく。
 - (2) 「教員以外の顔を大切にす意識の醸成」では、個人的な差異はあるが、経験値の高い教員ほど休暇や勤務の振替をうまく活用できている様子が窺える。教員には週休日の振替や勤務時間の割り振り変更の確実な実施や特別休暇（家族）の活用を奨励した。また在校時間 100 時間超の教員には個別面談を実施して意識改善を求めた。今後も必要な声掛けを進めていきたい。
 - (3) 「時間外勤務前年度比 5%減」では、昨年 1 月にミライム導入以後、前年度より増加する状態が続いており、2 月現在で前年度比 4%増となっている。特に繁忙期の 4、6、7、9 月には、昨年比 10%を超える増加となった。ポスター掲示や、有給休暇や勤務割振り変更の声掛けなども継続的に行っており、12 月までの他の月平均は 3.4%増にとどまった。帰れるときには帰ろうという意識づくりも進んでいるように感じる。ミライムを導入した前年 1 月以降の比較では、平均 12%減となった。

B 学校関係者評価委員名

河合保生（ノートルダム清心女子大学 文学部現代社会学科教授） 芦谷武司（元西栗倉中学校長・林野高校評議員） 大土井亮輔（建設設計会社経営 県民生委員児童委員会主任児童委員） 杉山知子（元実作大学教授・津山市文化振興財団評議員） 阿形国明（津山高校保護者） 飯綱浩二（津山中学保護者）

C 学校関係者評価

今年度の経営目標達成に向けての取組等について、内容と成果・課題を説明し、次のような意見・提言・評価をいただいた。

- (1) 生徒の授業中の態度は落ち着いていて本当によい。また、協働・グループ学習が積極的に取り入れられていて、教員間に共通理解があると感じた。「目標」については、大学でも「～できる」がよいと指導しており、授業の終わりにできるようになったかどうか生徒自身が確認できるものにしてもらいたい。
- (2) 1 年次はクラスによって学習時間の差があるが全体的によくになっている。2 年次は中だるみせずに伸びているのは高く評価できる。3 年次も成長したことがわかる。
- (3) 来年度一期生が卒業するときの入試結果に地域も注目している。少人数や習熟度別授業での難関志望者の仲間づくりがいいと思う。難関大学への進学意識を下級年次にも広げていってもらいたい。
- (4) 中学校のメリットは課題研究と英語だと考えるが、それが国公立の推薦入試に生きてくるのではないかな。小論文指導を通じてまとめる力、発信する力を鍛えてもらいたい。
- (5) 生徒の進路目標も単に「医師」ではなく、外科医や産婦人科医など、具体的に書いている。将来、AI の普及などで今ある仕事も変わっていくなか、生徒には自分が将来なりたいものをしっかりイメージしてもらいたい。キャリア・デザインについての学校の取組や仕掛けには感謝している。
- (6) 休憩時間にはよく挨拶してくれ、元気もよい。岡山県は挨拶運動が活発で、津山市内の各中学校もしている。津山高校には、挨拶励行を引き続き推進してもらいたい。
- (7) 津山高校も中学も課題研究をしており、そうした部分での交流も行われている。津山高校・中学間の様々な連携・交流を津山高校・中学の魅力としてもっと発信してもらいたい。

D 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

来年度は、融合と切磋琢磨 3 年目である。今まで積み上げてきた様々な手立てを手掛かりに、生徒の思考力や主体性をはぐくむ事業を展開していく。これらにより本校の使命である地域の教育をリードする活力と魅力あふれる学校づくりに努める。さらに広く未来社会や地域社会に貢献する人間の育成を進めるため、授業や学校行事等をとおして VGR を伸ばす取組を今年度以上に学校全体で組織的に推進する。また SSH 事業も 2 期目の 4 年目にあたり、研究成果を総括するとともに、今後の方向性を定める必要がある。そのため、新たな課題に挑戦する姿勢を大切に、自然科学研究をリードするグローバル人材育成を目指すとともに、WWL コンソーシアムとの相乗効果により、本校の魅力を一層高めたい。

なお、教員の充実感・満足度の向上や負担感の削減のために、引き続き業務の効率化と削減を検討する。そして、今後とも地域の方々、小・中学校関係者、保護者、関係機関等の意見を傾聴し、教育の環境や内容の改善と一層の充実を目指して、魅力ある学校経営を継続していく。